九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

水原秋櫻子研究 : その俳句形成過程について

野中, 亮介

https://doi.org/10.15017/2534370

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	野中　亮介
論　文　名	水原秋櫻子研究 ―その俳句形成過程について―
論文調査委員	主　査　　九州大学教授　　松本　常彦 副　査　　九州大学教授　　波潟　剛 副　査　　九州大学准教授　　西野　常夫 副　査　　愛媛大学准教授　　青木　亮人 副　査　　岡山県立大学教授　　柴田　奈美

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は昭和前期の俳句近代化運動において中心的な役割を果たした水原秋櫻子について、その俳句形成過程について多角的な視点から論証するものである。反伝統、反「ホトトギス」を掲げ近代的抒情や感覚の発揚による表現方法の革新と俳句形式による思想性・社会性の摂取を目ざした俳句近代化運動（新興俳句）は、現代にまで至る多様な広がりを見せている。しかし、嚆矢となった秋櫻子の俳句形成過程の具体的解明はなされていない。本研究は、その課題に対し以下の多角的な視点から論証している。

第一章は、秋櫻子が短歌から何を摂取したかについて、窪田空穂との具体的関係から考察する。俳句において主観や理想の重要性を説く秋櫻子の主張が、作者の心や思いを作品に乗せるための技法として「調べ」の重要性を説いた空穂の教えに根ざしつつも、先行研究とは異なり秋櫻子特有の受容があることを明らかにした。また、空穂は「空想」を詠むことを否定せず、これを俳句でも試みた秋櫻子の模索が、虚子の唱える「客観写生」から離脱し「ホトトギス」を辞す遠因になったことを指摘している。

第二章は、昭和十年代の俳壇で斬新であった秋櫻子による山岳俳句の形成が、空穂の乗鞍岳などの日本アルプス諷詠やセザンヌの影響を受けた安井曾太郎の山岳風景と関係することを論証した。さらに秋櫻子の山岳俳句に同時代の風景論に内在する「翻訳された西洋文明」という問題性があることを指摘している。

第三章は、虚子と秋櫻子の自伝的散文を対比し、「写生」と「空想」（「理想」）に対する両者の態度や評価の差異について抉出している。「客観写生」を説く虚子にも「空想趣味」を認める発言はあるが、「古人が一握りづゝの土を運んで築き上げて呉れた趣味」が前提条件で、根底には厳然と事実があるとし、一方、秋櫻子は、写生以前に一つの描くべき「理想」があり、それに添うかたちで現実を切り出すとする。上記の差異から両者の「写生」の内実について明らかにしている。

第四章は、秋櫻子の句集『古鏡』をはじめ、多く詠まれた野鳥俳句について、中西悟堂による探鳥会、昭和九年五月一日創刊の雑誌「野鳥」、馬酔木ハイキングなどとの関係から明らかにしている。秋櫻子の野鳥俳句の特色は、科学的な知識と連動し、同時代的な登山ブームやハイキングの流行との関係が指摘され、さらに、それを通じて山岳俳句と野鳥俳句が、ともに作句のための偶発的な素材ではなく、秋櫻子俳句の「西洋画」的風景の構築において通底することを指摘している。

第五章は、秋櫻子俳句の特徴である外光豊かな絵画性の具体的内実を検討する。秋櫻子俳句を「外光派」や「印象派」や「絵画」に喩えるのは一般的であるが、本論は、秋櫻子と絵画の具体的関係

について検討し、主観を重視した安井曾太郎との関係の重要性を指摘する。秋櫻子俳句の絵画性は、安井を媒介とするセザンヌや後期印象派の受容と関わることを指摘し、それを踏まえて絵画性の評価が「花鳥諷詠」を説く虚子と対照的になる理由を洗い出している。

第六章は、近代俳句における女流の問題について、秋櫻子の姿勢の特色を「台所俳句」を唱えた虚子との対照から描き出す。虚子の「台所俳句」には、ジェンダー的な差別構造が潜在的に内包されているとし、その「台所俳句」を廃止し、「婦人」や「家庭」という語句を前景化せざるを得なかった背景として、「台所」とその機能そのものの近代化という文化史的文脈が働いていることを指摘する。また、「台所俳句」に代表される虚子の「女流」戦略が結社の戦略と連動することを指摘し、虚子との対比から、秋櫻子の「女流」への姿勢の特色を明らかにする。秋櫻子の俳句における女性表現や秋櫻子を選者とする投句の分析から、秋櫻子の場合、基本的に「女流」という水準以上に、「馬酔木」的な近代性や芸術性が評価の尺度であることを明らかにしている。

第七章は、「馬酔木」で山岳俳句全盛期の代表作家の石橋辰之助の離脱の意味を考察する。石橋が勤務した劇場の上映映画を調査し、秋櫻子が「ホトトギス」を離脱した昭和六年から七年にかけて、山岳を描く多くの海外映画があることから、辰之助の山岳俳句の背景には、実際の登山のみならず映画の受容があったことを指摘する。モンタージュ理論の摂取に前向きな石橋に対し、秋櫻子は、その摂取に無季俳句の危険を察知したとし、石橋の離脱と山口誓子への接近に秋櫻子の新興俳句運動の限界を指摘している。

本論文は、上記の内容を通じて、俳句近代化運動の中心人物であった水原秋櫻子の俳句形成過程について、そこに影響した要素や関係する要因について、具体的な資料や発言をもとに論証している。さらに、その検討を通じて秋櫻子と新興俳句との関係の多様で具体的な様相についても明らかにしており、水原秋櫻子の俳句形成について最も基礎的な研究として評価できる。

以上から、委員全員一致で、本論文が比較社会文化学府の博士学位（比較社会文化）論文として十分な水準にあると判断した。